
お前たちをぶっ潰しに来たんですが。

雷雲

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お前たちをぶっ潰しに来たんですが。

【Nコード】

N7997M

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

夜景がきれいな街、ナイトシティに彼はいた。その名も、月牙雷斗！頭もよくて、運動神経抜群の正義の味方！！まさにヒーロー！と言うのは嘘。これは、運動神経は多分いいが、頭は少し悪い、正義の味方とも言えない、なんでも屋の月牙雷斗を主人公にした、物語である。

お菓子って一言でいつと何の菓子かわからないよね。(前書き)

黒い丸(四角?)は注目という意味です。
初の作品です。

お菓子って一言でいうと何の菓子かわからないよね。

『昔々、ある所に、おじいさんとおばあさん……と、オタクが住んでいました。』

オタクは、銃を使ったアクションゲームが好きでした。そしておじいさんとおばあさんが外で剣を使ってマジバトルしていたころ、マフィアがやってきました。マフィアは、超人的な力を持ったおじいさんとおばあさんと天才的な頭脳をもったオタクがいるという噂を聞いてここにやってきました。マフィアはぜひ自分の組織に入れと言いました。でも、おじいさんとおばあさんは反対しました。マフィアは怒って、銃で撃ち殺そうとしました。おじいさんとおばあさんは銃弾をすべてかわして、剣で斬りかかりました。ですが、おじいさんとおばあさんは負けました。大好物のどら焼きを投げられたからです。おじいさんとおばあさんはすぐにどら焼きにかぶりつきました。マフィアは「ドラえもんか…」と言い、銃で撃ち殺しました。オタクは、銃を使ったゲームを1個もらう代わりにマフィアの仲間になりました。オタクはマフィアロボを作りました。そして世界を征服しようと思いました。ですがマフィアが誤って押した自爆スイッチにより、マフィアロボが作られている工場がすべて破壊しました。ですが、マフィアロボはまだ全部がやられたわけではありませんでした。』

つぎからい
月牙雷斗は本を棚に戻し、図書館を出た。そしてバイクに乗り、道路を走っていった。

ここ、ナイトシティは、夜景が綺麗で、賑やかである。住民も少なくない。だが、近頃、マフィアロボが発見されたという報告もある。

「そういえば星美がお菓子買ってたって言ってたよね…」

雷斗は急に方向を変え、デパートに向かった。

……後ろで車がぶつかる音がした。

デパートは主婦たちでいっぱいだった。新しい商品でも売り出されたのかなと思った。

お菓子がある所にきた。だが、雷斗は、思った。

お菓子って和菓子？洋菓子？スナック菓子？駄菓子？何？豚肉？牛肉？

雷斗は走り、豚肉を取った。ついでに牛肉も取った。マグロも取った。マグロは、自分の大好物だからだ。星美の金がいいだろう。雷斗はカウンターに行き、商品を買った。そしてデパートを出た。星美に殴られるとも知らず、だが、雷斗はその前に危険がせまっていた。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

若い女の叫び声が聞こえた。

お菓子って一言でいうと何の菓子かわからないよね。(後書き)

（裏話）

雷斗「星美に殴られるってマジ？」

作者「うん。」

雷斗「あいつ、ヤベエ怪力持ってたよな……」

作者「どんぐらい？」

雷斗「岩に穴をあけます」

作者「……」

はい。わからないことだらけです。

雷斗は叫び声が聞こえたほうへ向かった。そこには若い美人の女^{レディ}がいた。

「どうしたんだ？」

「マフィアロボが……」

女の指差した先には、マシンガンをもったマフィアロボ達がいた。（なぜいたかわからないが。）マフィアロボは黒いスーツを着ていて、

「カネヲダセエ！ソウスレバタスケテヤラア！！」

そう言いマシンガンを上空に撃った。周りの人間は動揺したり泣き叫んだり悲鳴を上げた。

「報酬は三千でいいな」

「え？…は、はい…」

雷斗はマフィアロボの所へ歩いて行った。

「ン？ナンダデメエハ？」

「お前たちをぶっ潰しに来たんですが。」

「ナンダト！？」

「ムカツク、コロセ！」

「オウ！」

マフィアロボ達はマシンガンで撃ってきた。雷斗は物陰に隠れた。そしてどこからか、リボルバーを二丁取り出した。リボルバーはコルト・パイソンだった。（なぜかはわからないが。）

「行くか…」

雷斗は飛び出し、スライディングしながら、銃で撃った。マフィアロボには効いているようだった。

だが、一発では倒れない。3〜5発は必要だ。と、雷斗はそう思った。

雷斗は、そこに転がっていたスケボー（なぜあつたかはわからない

いが。）に乗り、マフィアロボ達に向かって突進しながら、銃を撃った。

マフィアロボ達も負けずと撃ってきた。雷斗は横にジャンプした。スケボーは、一体のマフィアロボの足に当たった。マフィアロボの呻き声を聞きながら、雷斗はその隙に銃で撃った。

マフィアロボが一体倒れた。爆発はしない。て言うか爆発したら怖い。

その時、足に何か当たった。足元にはMAS 49半自動小銃があった。（なぜあつたかはこれまたわからないが。）

「一応使ってみるか…」

雷斗はコルト・パイソンを直してその銃を持ち、マフィアロボ達に突撃した。

ほんの数秒だった。

マフィアロボは全員倒れていた。

「……今爆発なんかするなよ」

雷斗はあの女に報酬と頬にキスを貰い赤くなりながらバイクに乗って走った。
レディ

はい。わからないことだらけです。（後書き）

裏話

雷斗「……………あのついでにメールアドレス教えてもらえばよかった。

「
作者「おれ持ってるよ。」

雷斗「ええ!？」

作者「だって作者だもん」

雷斗「むかつく……」

なんでも屋は、人殺しだって引き受ける。

雷斗はバイクを止めた。

そして、ある建物に入った。

「ただいまーっと。」

雷斗が言った。

「やつときたあああああああああ！！！！」

その声と共に女が走ってきた。

「うるせーなあ。星美。」

「お菓子！！給料！！」

「わかったわかった」

雷斗は袋を星美に渡した。

「……ん？」

「どうした？星美」

「これ……」

星美が取りだしたのは、牛肉、豚肉、マグロだった。

「どういうこと？お菓子って言ったよね。（怒）」

「いや……これは……」

「あは（笑）」

星美は拳で壁に穴をあけていた。

〃一時間後〃

「で、給料」

「あ、ああ……」

雷斗が星美に何をされたかは読者にもわかると思うが、雷斗は一時間、殴り続けられた。

雷斗が給料を渡した瞬間。気を失ってしまった。

「……じゃあね」

星美は出て行った。

雷斗が入って行った建物は「なんでも屋」。

星美はそこで働いている。というか、ろくに仕事もせず、給料をもらっている。

雷斗はそこに住んでいて、いつもゲームをしている。

翌朝、星美がやってきた。星美はすぐにソファーに座り、テレビを見ている。

雷斗はパソコンでゲームをしている。

みんなダラダラ。

そこに、ひとりの女がやってきた。

「あの」

「ん？」

「依頼を頼みに来たんですが」

「何の依頼？」

雷斗はそういうと、星美をどかして（星美は寝ていた。起きているときにそうすると必ず殴られる。）ソファーに座った。

「ある人を殺してもらいませんか？」

「へ？」

「なんでも屋なんですよ？」

「……………まず聞こう。誰だ？」

「私の彼氏です。今、ツインマンションの五階に住んでいます。名前は直坂光輝なおさかこうきです」

「なぜこの依頼を？」

「よくぞ聞いてくれました。あいつは、私を殺そうとしています。

昨日も、私の部屋に入り、ナイフで殺そうとしました。その時は近くの人が助けてくれましたけど」

「報酬は？」

「三億円です。サマーギャ○ボで当たった金です」
「わかった。引き受けよう」

依頼人、鹿野島麗子かのしまれいこは公園で、ある男と待ち合わせをしていた。その男は明るく、麗子の新しい彼氏だった。前の彼氏、直坂光輝には秘密らしい。

新しい彼氏、東孝太郎ひがしこうたろうは光輝とほとんど同じ体格で、高校の時、彼女にフラれたと言う。偶然、その人と麗子は顔がそっくりだった。

雷斗は光輝が住む、ツインマンションへ向かった。時間は夜12時、仕事をするにはとてもやりやすかった。道路は車が少なく、とても静かだった。

雷斗はツインマンションの五階についた。依頼人からは、その手前から2番目の部屋だという。

雷斗はその部屋の窓から入ろうとした。窓の近くには階段があったため難なく入れた。

そして雷斗が見たのは、血を流して倒れている青年と血の付いたナイフを持ったフードをかぶった男の姿だった。

なんでも屋は、人殺しだって引き受ける。(後書き)

～裏話～

星美「ごめんやりすぎちゃった?」

雷斗「やりすぎだ。あざができたぞ。」

作者「雷斗にはどんどん殴られてもらっからね」

雷斗「いつか死ぬぞ。俺。」

姿隠して声隠さず。(前書き)

いまさらキャラクター紹介
つきがらいつ

月牙雷斗

金髪の男、主人公、なんでも屋をやっている。武器はコルト・パイ
ソン。頭が悪い……………かもしれない。

姿隠して声隠さず。

「クソッ！」

フードをかぶった男はドアの鍵を開け、逃げたした。男は意外に足が速かった。数分後、どこからパトカーのサイレンが聞こえた。「とりあえず逃げよう……」

雷斗は窓から階段に飛び移り、屋上でほかのマンションの屋上に飛び移った。そして、そこからバイクを使って逃げようとした。だが、バイクの所には、すでに警官がいた。

「いたぞ！あいつだ！」

警官達はなぜか雷斗を追ってきた。

「……なんで？殺したの俺じゃないよ？」

殺そうとしたのは事実だが。

雷斗は小さな家の屋根に上り、屋根と屋根を飛び越えながら逃げた。だが、6回目の跳び越えの時、誤って家と家の隙間に落ちてしまった。運よくフェンスはなかった。

フェンスがあつたらケツにグサリだが。

雷斗はうまく警察から逃げられた。

雷斗はバイクの周りに警察がいなか確認すると、そのまま走りだし、バイクに乗った。

雷斗がバイクで道路を走っていると後ろにパトカーがやってきた。

「待て〜！ル〇ン〜！」と、言いそうな予感だった。

その時、パトカーの窓から何かが出てきた。

「……………拳銃だ」

そして警察は撃ってきた。

「殺す気だろおおおおおおお！！！」

雷斗はコルト・パイソンを取り出した。

「こうなったら仕方がない！！！」

雷斗は後ろを振り向き、撃った。だがパトカーの装甲には効かなかった。

そして警察も撃ってきた。

はい。カーチェイスです。

10分後、弾が切れたので、雷斗はMAS 半自動小銃を取り出し、撃った。パトカーのタイヤに弾が当たり、パトカーは遠ざかって行った。

「最初っからこれ使えばよかった」

雷斗はなんでも屋に帰ってきた。中には、依頼人、鹿野島麗子とその新しい彼氏、東孝太郎がいた。

「成功したんですか！！」

麗子はそう聞いてきた。

雷斗は「誰かが先に殺した」などと言えない。それに、それを言うと報酬ももらえない可能性がある。「はい」と、一言だけいった。孝太郎は、大きなため息をついて、

「よかったあ」

と言った。その時、雷斗はある事に気づいた。

直坂光輝を殺した犯人と声が同じだ。

雷斗は孝太郎の腰を見た。なんとナイフが鞘に入れられて装着されている！

孝太郎は雷斗が自分の腰を見ていることに気づき、「早く帰ろう」と言った。

雷斗に麗子は報酬（三億円）を渡し、去って行った。孝太郎の不気味な笑顔が見えた。

二人が出て行ったあと、雷斗は星美に話しかけた。

「すまないが、あの二人を追ってくれないか？」

「えゝ？めんどくさゝい」

「あの東孝太郎というやつが俺が殺そうとした男を殺した奴かもしれないんだ。もしかしたらあの依頼人も殺されるかもしれない。」

「……………まあ…暇つぶしにはなるかもね」

星美は出て行った。雷斗はふと思った。

星美が俺の言うことを聞くんて普通あり得ないことじゃないか？印象が最近upしたのか？

麗子と孝太郎は路地裏を歩いていた。二人は公園についた。

「ねえ、なんでこんなところに連れてきたの？」

「なあ、麗子、俺が高校生の時、一人の女にフラれたことは知ってるよな？」

「う…うん」

「その女とな、俺は付き合ってたんだ」

「……………」

「だが、そいつはほかの男と付き合ってた、俺のことなんか遊び相手としか思っていなかったんだ。そして、その事を俺に話して「反省してるもう別れよう」と言った時、俺はどうしたと思う？」

「…わからない」

すると、男は間を空け、言った。

「殺したんだ」

「えっ…」

「俺はそいつを殺した。ナイフでな。だがあの無能の警察は俺を捕まえられなかった。そして時が経ち今ここにいる」

男は笑った。

「お前はその殺した奴と似てるんだ。それが妙にイライラするんだ。だからさあ、お前を殺させてくれないかああ!!」

男はそう言いナイフを取り出した。その時、後ろから銃声がした。地面に穴があいている。

銃を撃ったのは星美だった。星美の持っている銃はブレン・テンだった。

「あいつの言ってたことは本当だったんだな」

「クソッ、なんでも屋の奴らか!」

「お前がどう反抗しても私には勝てないよ」

「どうかなあ…おい!おめえら!!」

その時、どこからかマフィアロボが現れた。

「っ!なんでマフィアロボが!!」

「こい!」

「いや!」

麗子は連れ去られていってしまった。

姿隠して声隠さず。（後書き）

雷斗「やっとキャラクター紹介だな。」

作者「はい。次は星美です。」

星美「読者に悪い印象与えないでね。」

作者「は・・・はい。」

雷斗「お前には悪い印象しかないと思うんだけど。」

カチャ：ズダダダダダダダン！！

雷斗はハチの巣にされたとき

空手を習ってた人？S空手、柔道、合気道を習ってた人（前書き）

キャラクター紹介

くまどうほしみ

熊堂星美

青い色の髪をしている女。ショートヘア。なんでも屋で働いている。
美人。優しい。仕事熱心。

空手を習った人？S空手、柔道、合気道を習った人

星美はマフィアロボ達に苦戦していた。孝太郎と麗子はもういない。

カチツカチツ

弾切れ。星美の銃にはもう弾がない。

もう終わりか

星美はそう思っていた。マフィアロボは星美に銃を向けた。

ダン！！

撃たれたのは星美ではなく、マフィアロボだった。

ダン！！ダン！！ダン！！ダン！！

マフィアロボ達を次々と銃弾が襲う。

銃を撃ったのは雷斗だった。

「……遅すぎだよ」

「すまないな。星美。やつは当たってたか。ほら、弾だ」

雷斗はポケットから弾を取り出し、星美に渡した。

「……依頼人はあいつに連れ出された。ここは私がやるから早く行け！」

「わかった。気をつけるよ」

「言われなくてもわかってる！！」

星美はそう言いながらマフィアロボを撃つ。

雷斗は孝太郎が逃げた方向へ走った。

「ほら！早く行け！」

んっ！

麗子は口をガムテープで貼られ、手は縄で縛られていた。

「お前を殺すのはもうやめだ。奴隷として売り払ってやるぜ!!」

コトコトコト

「っ！誰だ！！」

もちろん、雷斗だ。

「く……まあいい。ここで死んでもらうぜ！」

孝太郎は持っていた銃、デザートイーグルで雷斗を撃った。だがその時には雷斗はいなかった。

「っ！どーいった！！でてーい！！」

「いいだぜ！」

孝太郎が後ろを振り向くとそこには雷斗がいた。雷斗が銃を構え、孝太郎の足に撃とうとした。

カチツカチツ
.....

「……あれ？」

⌋
⋮
⌋

「しまったああああああああ！リロードするの忘れたあああああああ！」

孝太郎は銃をはじき、雷斗を蹴り飛ばした。

「ぐべええええええええええええ！」

「俺はなあ、空手を習ってたんだよ。」

「ぐ……………」

孝太郎は銃をホルスターにしまった。

「さうて。ここからは肉弾戦と行こうじゃないか」

雷斗は立ちあがった。

「……………いやだ」

雷斗は自分の銃へ走りだした。

「いや！空気読めよ！！これ小説だろ！？」

それでも雷斗は走る。

「くそっ！」

孝太郎は銃を取り出した、その時にはもう雷斗は銃を持っていた。

「く……………」

その時、誰かが孝太郎を蹴り飛ばした。

蹴り飛ばしたのは、なんと麗子だった。

「こう見えても、空手、柔道、合気道を習ってたんですよ？」

その後ろには星美がいた。麗子を縛っていた縄をほどいたらしい。

「ぐ……………このおおおおおおお！！！」

孝太郎は殴りかかった。だが、すぐに受け止められ、逆に腹に殴られた。

「まだだ！！！」

孝太郎は蹴ろうとした。だがまたしても受け止められ、そのまま投げられた。

孝太郎は立ち上がろうとした。その隙に麗子は回し蹴りをした。

孝太郎は気絶してしまった。

数時間後、警察署の前に、倒れている誰かがいた。扉から警官が出てきた。警官は誰かが倒れていることに気づいた。

「お、おい！どうしたんだ！！」

その誰かには、背中に何か張られていた。貼られていたのは紙だった。紙に何か書かれていた。

「こいつは、東孝太郎。直坂光輝を殺した。今すぐ逮捕しろ」

空手を習った人？S空手、柔道、合気道を習った人（後書き）

星美「作者、ありがとね。」

作者（みなさん。ごめんなさい。こうするしかなかったんです。）

雷斗「熊堂星美、青い髪をしている女。ショートヘア。なんでも屋で働いているがよく仕事をさぼる。怪力。凶暴。熊みたいに怖い。とりあえずやばい。」

星美「なんだと！！もういつかい八チの巣にしてやろうか！！」

雷斗「ごめんなさい……」

いわゆるゾンビです。

「言う事です」

麗子は驚いていた。麗子がナイフで殺されそうになったとき、助けたのはあの光輝で、殺そうとしたのは孝太郎だからだ。すべて、殺そうとしたのはあの孝太郎だったのだ。

「それと、これが直坂さんの家に置いてありました」

警察官はある物を麗子に渡した。

「これは、あなたに渡したほうがいいでしょう」

それは指輪だった。どうやら、光輝は麗子にプロポーズをしようとしていたらしい。

「では、これで」

警察官は麗子の家を出て行った。

「依頼が全然来ねえええええええええええ！」

ここはなんでも屋。もうあれから一か月。何の依頼も来ていない。

「言っとくけど、給料払ってよ」

「…………」（もうすぐで財布が空っぽだ…………）（ほとんど星美に係する出費で）

星美はポテトチップスを食べながらテレビを見ている。

そして夕方。ドアが開いた。開けたのは研究員らしき男だった。

「ここがなんでも屋ですか？」

「はい。」

「依頼があるんですけど」

「キタアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アア!!!」

「…………あの〜」

「あ、…………すみません。ここに座ってください。」

ソファーに男は座ったが、もう一つのソファーは星美が独占しているの、椅子を持ってきたて座った。

「で。依頼って?」

「はい。フェアリーマウンテンに行きたいんですが、妖精がいて危険なため、護衛をお願いしたいのです」

「ふーん。フェアリーマウンテンって何?」

「え…知らないんですか?」

「うん。知らない」

「…………この街の東にある山です」

「ふーん。で、妖精って何?」

「妖精とはいわゆるゾンビです」

「え……………」

「そいつに噛みつかれるとその仲間になります」

「でも、ゾンビなんかこの街にいないぞ?」

「いや、ゾンビの活動範囲はその山だけなんです」

「それから、ゾンビは銃は効きません」

「ええ! いや、そんな依頼無理でしょう……………」

「そうですか」

男は立ち上がった。

「そういえば、報酬は?」

「3億です。サマー ज्या ○ボで当たった金です」

男はそう言いながら出て行った。雷斗はすぐに男を捕まえて、ソファーに座らせ、言った。

「引き受けます」

「そうですか! では、明日の昼1時に、ここに来ますので」

男は出て行った。

「言っとくけど私は行かないからね」

「わかってる。何か近接武器がここにあったっけ」

「物置に刀があるよ」

「どうも」

雷斗はこの建物の裏にある物置に向かった。物置の中は暗く蜘蛛の巣が張っていた。雷斗はそこから、刀を取り出した。

いわゆるゾンビです。（後書き）

雷斗「次はゾンビか」

作者「はい。結構手強いように設定しています。」

星美「噛みつかれたらゾンビになるか……よくあるパターンね。」

作者「ゾンビって言われたら、そんな特徴しか思いつかねえんだよ
！！」

雷斗「作者の独創力が死にました（笑）」

呻き声をしないゾンビって逆に怖い。

「すいません。依頼なんです…」

あの研究員らしき男がやってきた。

「おう。待つてたぜ。そんじゃ行きますか」

「はい」

雷斗は刀を持ち、研究員らしき男について行つた。そして十分後、奇妙な形をした山へ着いた。山は中心に穴があいていて、木が所々なくなっている。

「あれは、妖精が喰つた後なんですよ」

「なっ…」

雷斗は固まつた。

「さあ、行きましょう。仲間たちが来ています」

雷斗たちはそこにあつた小屋へ行くと中には精密な機械を背中に背負っている研究員らしき男たちがいた。

「よう。聖樹^{しょうき}。待ちくたびれたぞ。今日は重要な研究をするんだから」

「すまない。ほら、護衛を引き受けてくれた人だ」

「おう。誰だか知らんが頼むぞ」

「あ、ああ」

そして研究員達はフェアリーマウンテンに登ることになった。

辺りは静かだった。聖樹が言った。

「気を付けてくださいよ、すぐそばにいるかもしれないですから」

雷斗はよくゾンビは呻き声をあげることを知っていたので、（ゲームでだが。）まだ声が聞こえないうちは大丈夫だと安心していただが山に入つて十分後。

雷斗が後ろを振り返ると5m先には、白目をむいた人（？）が歩いていた。

「……………まさか。あいつか？」

「……………逃げろおおおおおー！」

研究員達は一目散に逃げ出してしまった。

「呻き声をしないゾンビって逆に怖い」

妖精はその声に気づき声がしたほうへ走って行った。どうやら視力はないようだ。

「うわあああああああああああああー！」

また研究員たちの叫びが聞こえた。雷斗は刀で妖精たちを切り倒しながら叫びが聞こえたほうへ走った。切り倒された妖精たちはまた起き上がっていた。

研究員たちのもとへ行くと、そこには無数の妖精たちに囲まれている研究員たちがいた。聖樹が叫んだ。

「やつらの弱点は頭です！」

雷斗は刀を持ち妖精たちに斬りかかった。妖精たちを斬っている、肩を妖精につかまれた。妖精が雷斗の喉元に噛みつこうとする。雷斗は素早く銃を取り出し妖精の頭を撃った。妖精はよろめいた。銃だけでは倒せないがよろめかせることはできた。雷斗はその隙にその妖精を斬った。

撃って斬って撃って斬って撃って斬って。そうするうちに妖精たちは倒れて行った。

最後の妖精が倒れた。研究員達は全員無事だった。研究員たちは「企業秘密だ。」と言って、雷斗に研究を見せないようにしていた。

そして研究が終わった。研究員達は機械を背負い、ふもとへと歩いて行く。その時、銃声が鳴った。

研究員達の目的

雷斗は銃声の鳴ったほうへ走った。研究員達はふもとまでもうすぐなので大丈夫だろう。

そして雷斗は妖精に喰われようとしている星美を見つけた。

雷斗はすぐさま妖精を斬った。

「…大丈夫か？」

「刀を持っていったのはこういうことだったんだな……」

そこで倒れていた妖精には沢山の銃弾であけられた穴が開いていた。

「…で、なんでここに？」

「あの研究員達が何のために研究をしていたかわかるか？」

「…いや。」

「…マフィアロボを剣も銃も効かないやつらにするためだよ。」

「なんだって!？」

「あたしは、そう父さんからそう聞いたんだ。そして、あの研究員達の目的は……」

「この街を…破壊すること。」

「……っ!？」

「なぜかは知らんが、そうしようとしているらしい。」

「とりあえず、帰るぞ。」

雷斗たちがなんでも屋に帰ると、そこには机に置かれた報酬と椅子に座っている髭を生やしたマッチョのおっさんと20代の男がいた。

「…っ！あいつらは！？」

「…わからない。」

「ったく。お前一人で行くからだ！！」

このおっさんは星美の父、源幸げんこうである。源幸はマフィアであり源幸の部下、要人かなめひと大翔は星美の友達である。

「…大翔！！やつらはどこだ！！」

「………ウエポンビルにいるよ。」

そこにいた男が言った。この男が大翔である。

「よし！！それじゃあウエポンビルに行くぞ！！」

「わかった。」

大翔は持っていたノートパソコンを閉じ、ドアの所へ行った。腰にはホルスターに入れられた拳銃のトカレフTT 33があった。

「おい！！大翔！さっそくあいつらをウエポンビルに向かわせるよう指示しろ！！俺は先に行く！！」

「わかった。」

源幸はなんでも屋を飛び出し、大翔はケータイを取り出した。

「……健人か？」

『…大翔か。いったいどうしたんだ？』

「みんなをウエポンビルに向かわせる。ボスの指示だ。」

『わかった。すぐにむかわせる。』

大翔はケータイをポケットに入れ、なんでも屋を出ようとした。

「大翔！！」

「…なんだ。」

「あたしも行く。」

「…好きにしろ。」

「俺は行かないぜ。タダ働きは嫌だからな。」

「…あつそ。」

星美と大翔は出て行った。

研究員達の目的（後書き）

（裏話）

雷斗「あれ？まだこのコーナーやってるんだ…」

作者「はいやってます。」

雷斗「7話目はやってなかったのに…」

作者「それはぼくのミスです。」

雷斗「ふーん。」

星美「この物語もなんかシリアスになってきたような。」

作者「はい。その通りです。」

雷斗「それにしても、次話は俺は登場しないことになってるじゃないか。」

作者「雷斗には休んでもらいます。」

星美「あとはあたしが主人公ね」

雷斗「ええ！？」

襲撃 3 - 1 (前書き)

〔キャラクター紹介〕
くまどうげんごう
熊堂源幸

茶色い髪をしているマッチョなおっさん。星美の父。妻を亡くしている。マフィア「赤い狼」レッドウルフのボス。最近邪魔なマフィアロボを全員ぶっ潰そうとしている。

襲撃 3 - 1

ウエポンビルは社員が帰宅するころだった。ここを襲うにはちょうどいい時間だろう。星美はそう思いながら物陰に隠れていた。そばにいた大翔は電話をかけた。

「ボス、準備はいいですか」

『その前に星美に代われ』

大翔は星美にケータイを渡した。

「何？」

『バカヤローーーーーー!!!!!!』

その声はあたりを見回していた大翔にまで聞こえた。

「な、何！？」

『なんでお前かくるんだよ!!』

「わたしだけじっとしているなんてやだ！」

『お前は俺の宝物なんだぞ!!』

「宝物は暴れたらいけないわけ!？」

『……とりあえず、死ぬなよ。大翔に代われ』

星美はケータイを大翔に渡した。

「なんですか？ボス」

『星美に何かあったら殺すぞ』

「……わかりました。で、何時に襲撃します？」

『10時だ。健人たちにもそう知らせてある。』

「わかりました。」

大翔は電話を切った。今は9時49分。襲撃まで約10分。大翔はじつとウエポンビルを見続けていた。後ろには星美と仲間6人。ほかにもボスたち13人が襲撃の準備をしている。

襲撃まであと5分。その時、ドアが開いた。

中から出てきたのはマフィアロボ達だった。9体いる。

「な、なんでこんな時に！」

ケータイが鳴った。大翔は電話に出た。

『大翔も見たな。マフィアロボがいる』

「はい」

『なぜだか知らんが、ステルス作戦で行くぞ』

「了解」

『俺たちが左の3体を潰す。真ん中の三体は健人たちに任せる。お前たちは』

「右の3体」

『そうだ。なら、なにかあったら電話で報告しろ。作戦開始』

電話が切れた。大翔は星美たちにその事を話し、路地裏に向かった。マフィアロボはウェポンビルの近くをウロウロしている。まずは路地裏に隠れ、マフィアロボが路地裏に近づいたところを攻撃する。そう 大翔たちは決めていた。マフィアロボがこちらに近づいた時ケータイが鳴った。マフィアロボが気付いた。

「ン？」

大翔はそれに気づき、マフィアロボを投げ飛ばし、頭を撃った。マフィアロボが動かなくなった。

大翔は電話に出た。健人からだった。

『大翔！気をつける！トラップだ！あいつらにはライフマークが装着されている！』

「なに！？」

『まさか…』

「ああ」

「このことはボスに知らせる。そこから逃げろ！」

ライフマークとは、仲間の状態を把握できる装置だ。仲間に異常が起こった場合、すぐにそこに向かうことができる。

「みんな逃げろ！」

大翔達は奥に走り出した。

「ダレカイルゾ！」

どうやら気付かれたらしい。大翔は銃を取り出し後方に撃った。大翔たちを銃弾が襲う。大翔達は何とか物陰に隠れた。どうやら仲間一人が撃たれたらしい。

「この傷ならまだ大丈夫だ。とはいえ、このまま進むのは危険だ。星美とあと一人待機してくれ。」

「やだね！わたしもいく！」

「……しかたない。俺が先に行く。お前はバックアップを頼む。」
その時、ケータイが鳴った。

「大翔、大丈夫か？」
源幸からだ。

「はい大丈夫です。ですが1人負傷しました。今は俺と星美と他の奴ら4人だけです」

「あと一人は？」

「負傷した奴と共に待機しています。」

「わかった。マフィアロボ達は全員ぶっ潰した。だが、まさかライフマークが取り付けられてたとはな」

「あれはたしか、未売品のはずです。」

『どうやって手に入れたかは予想できる。おそらく工場から持ち出したのだろ。今、ウェポンビルの入り口で待機している。お前たちも早く来い』

「了解」

大翔達は路地裏を通り抜け、ウェポンビルの入り口に着いた。入口には源幸や健人達がいた。

襲撃 3 - 1 (後書き)

裏話

雷斗「久しぶりにキャラクター紹介だな。」

作者「はい。そんなにキャラクター出てきてませんでしたので。」

星美「鹿野島麗子とかいたじゃん。」

作者「いちいち書いたらめんどくせーじゃん。」

久々に鹿野島麗子登場。

作者「ええ!？」

ボカ! ドカ! ゴキ! ボリボリボリボリ! ドガアアアアアアア
!!!!

終(作者の命が)

襲撃 3 - 2 (前書き)

かなめひろと
要人大翔

マフィアの一員。熊堂源幸の部下。茶髪。武器はトカレフTTT - 3
3。熊堂星美と友達。

襲撃 3 - 2

バアアン!!

源幸は蹴りでドアを開けた。中は誰もいない。会社員は全員帰ったようだ。

「星美と大翔は1階！健人たちは2階！俺たちは3階を探索する！終わった奴らはもつと上の階を探索しろ！」

源幸や健人達は上の階へ行った。

コツコツコツコツ……

「ボス。あの二人に任せていいんですか？」

「ああ、大丈夫だ。いざとなれば俺が助けに行く」

星美はカウンター、大翔は奥の作業室を探索していた。

「いない。大翔、そっちは？」

「こっちもだ。　　っ！」

ガタン!!

「え　　」

作業室では研究員と大翔が取っ組み合いをしていた。なんと研究員はロッカーに隠れていたのである。さっきの音はロッカーから研究員が飛び出した音である。

研究員と大翔はお互いに服を掴み合い転がっていた。大翔は服を掴みながら研究員の顎を蹴った。そして研究員が服を離れたその隙に、大翔は立ち上がり研究員を起き上げらせ、ロッカーへ叩きつけた。

「いえ！リーダーはどこだ！」

「リーダー？そんな奴いないぜ」

「ふざけるな！」

大翔は研究員を殴った。だが、研究員は殴られながらも膝蹴りを大翔に喰らわせ、内側のポケットからナイフを取り出した。

「死ね！！」

「動くな！！」

研究員は声がしたほうへ顔を向けた。星美だった。

「ナイフを置け！！」

研究員はナイフを置いた。次に見えたのは拳銃を持っている研究員だった。

「っ！しまった！」

星美は机に隠れた。机に置かれたパソコンを銃弾が襲う。

研究員は銃を大翔に向けた。大翔は前転で机に隠れる。そしてトカレフTT 33を机から突き出す。

ダンダンダンダン！

銃弾は研究員の足に当たり、研究員は倒れた。呻いている。大翔はマガジンを変え、研究員に銃を構えた。

パシュ……………

「……………殺したの？」

星美が歩み寄りながら言った。

「いや、眠らせただけだ。」

大翔は研究員が何か持っていないか調べた。研究員が持っていたのは名前が書かれているカードだけだった。

コツコツコツコツ……

「ん？」

カチャ……

「動くな」

星美と大翔の後頭部には銃口が押し付けられていた。

「やつぱ、桂太は頭が悪いなあ。ロッカーに隠れるなんてよ。」

「そうだよなあ。でも、桂太はそれなりにがんばったなあ。」

「だが、名前も見られちゃしょうがねえなあ。」

声からして、星美と大翔の後ろには3人ほど男が居る。

その時、二人の間から銃が飛び出した。

「殺そう」

ダン！

二人の目の前にいた研究員の頭には穴が開いていた。床にある血の水溜りがどんどん広がっていく。

「やべえ。服が汚れちゃった」

「ふざけるな。お前たち、何しにきた」

「……………」

「おい。聞いてんのか？」

星美と大翔はこそこそ話をしていた。

「ちっ……」

研究員はトリガーを引こうとした。

ガシヤアアアアアアアアアアアン！！

「っ……」

突然、窓が割れた。

「……………よう」

雷斗だった。

「雷斗！なんでここに！？タダ働きは嫌だと言ったる……」

「それがね……お前の親父から頼まれたんだよ……報酬200万円だな」

「お前！いったい誰だ！」

「お前たちをぶっ潰しに来たんですが」

「ふざけんな！」

研究員は銃を雷斗に向けた。雷斗は素早く机に隠れた。

「殺せ殺せ殺せ……」

研究員達は銃を雷斗に向けた。星美と大翔はその隙に研究員達を蹴った。

「ぐおっ……ちいっ……」

研究員は蹴られながらも二人を撃った。星美は攻撃を防いだが、大翔の腕は赤かった。

「大翔……」

「……大丈夫、かすっただけだ。」

「くそっ……」

星美は走りながら銃で研究員達を撃った。雷斗を撃っていた研究員が倒れる。星美は弾がなくなるとスライディングし、物陰に隠れ

ながらリロードをする。

「おら！！」

雷斗が飛び出し研究員の二人にラリアットを喰らわせるその隙に頭にコルト・パイソンを向ける。

雷斗は交互に研究員を見ていた。

「ゲームオーバーだ」

「まだだ！」

研究員はナイフを取り出した。

「コンテニユーは無理だな」

そういつた瞬間に研究員は肩を撃たれていた。

「これは強制だ」

「ぐ……………」

「終わったぞ」

大翔と星美は少しずつ歩いてきた。大翔が麻醉弾を撃った。

パシュッパシュッ……………

研究員達は眠りについた。研究員達と大翔達を残し、雷斗は上の階へと昇って行った。

2階、倒れている研究員以外誰もいない。

3階、倒れている研究員以外誰もいない。

4階、5階もそうだった。

そして、6階。そこには傷つき倒れているマフィア達がいた。
「なっ……………」

そして、奥の黒板に立っているのは研究員だった。

「お前は……聖樹か」

研究員はその声に気づき、振り返った。

「ああ、これは……なんでも屋の人ですか。あなたもいたんですね」

「ぐ……くそっ……強いぞ……」

雷斗の足元には血を流し倒れている源幸、健人がいた。

「……なぜこんなことをするんだ？」

「なぜって？邪魔ですからね。」

「……おい。ボス」

「……生かすか殺すか。どっちにする？」

「どっちでもいい」

「なら……殺す」

カチャ……ダンダンダン！

雷斗は二丁のリボルバーで聖樹を撃った。だが、瞬時に机を倒し防いだ。次に出てきたのは、機関銃だった。

「なっ……」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ！

机にあったものを銃弾が襲う。銃弾の雨が止んだあとにはパソコンや資料を入れる棚はハチの巣になっていた。

「これほどの大人数がやられた原因はこれだったのか……攻撃もできない。装弾の時を待つか。……今だ!!」

研究員は雷斗が飛び出したのを見て笑った。
「甘いな」

カチャ…………

「しまった!!」

ダン!!

撃たれたのは雷斗ではなく

聖樹だった。

「K様……………」

聖樹の後ろにはフードを被った謎の男がいた。

「……………用済みだ」

聖樹は

死んだ。

襲撃 3 - 2 (後書き)

裏話

雷斗「なんだ、俺出てきたじゃん！」

星美「…これはどういうことなのかな？」

作者「いや、物語的にはこう言うのがいいかな…と。」

星美「雷斗の件はともかく、なんで最後は登場しないんだよ!!！」

作者「それは……………」

星美「もういいや (笑)」

あとはご想像で

襲撃 3 - 3

「聖樹?.....」

聖樹はもう言葉を発しない。

「さて、帰りましょうか」

謎の男は銃を取り出した。

拳銃、コルト・アナコンダ。

ダンダンダン!!

謎の男は窓に向けて三発撃った。窓は割れ、地面にガラスが降り注ぐ。

「じゃ、さよなら」

謎の男は助走をつけて窓から飛び出した。

「なっ! 正気かあいつ!?」

謎の男は道路を飛び越し向いのビルの屋上に飛び移った。

「こいつを使え!!」

源幸は立ち上がって銃らしきものを渡した。

「ワイヤーショットだ!! そいつを使って飛び移れ!! あれを渡しちやいかん!! 頼りはお前だけだ!!」

「はあ..... 来なきゃよかった。」

雷斗はワイヤーショットを構え、トリガーを引いた。すると何かが一瞬にして飛び出し、向こうにあるビルの屋上のフェンスに引っ掛かった。そして、雷斗は引っ張られた。

「ひゃっほう!! これはこれで楽しい!!」

シューウウウウウウウウウウウウウウゴン!!

「こへっ!!」

雷斗の腹がフェンスに強打した。

「飛び移り成功……でもいてえ……」
謎の男が振り返った。

「ふ…面白いものを持っていますねえ」

「悪いが仕事なんだ。その変なカプセルを貰うぜ。それがあのおっさんの欲しがつてた物らしいからな」

「なら、奪って見せなさい」

「……んじゃ、遠慮なく」

雷斗は走りだした。コルト・パイソンを両手に持って。

謎の男はコルト・アナコンダを構えた。そして撃った時には、雷斗は既にいなかった。

雷斗は飛んで、謎の男の頭上を飛び越していたのだ。そして謎の男の後ろに立ち、振り返り銃を向けた。

だが、そこに見えたのはもう一つのコルト・アナコンダがこちらを向いていることだった。

ズダァン！！

「なっ……」

「君を殺すのは惜しい。試作品ですが、傷薬の注射をうつておきましよう。」

謎の男は注射器を取り出し、雷斗の腕に注射した。

「それでは、さよなら。」

謎の男はビルを飛び移って去って行った。雷斗は次第に瞬きの時間が長くなり、そして、目を開けなくなった。

「

い

い

おい

おい!!」

「う……………」

「やっと起きたかバカヤロー……!!」

雷斗は頭に痛みを感じた。そして、最初に見たのは星美だった。

「心配したんだぞ! まったく!」

「……………俺、撃たれたんじゃ?」

「それが、服に穴は開いてるけど傷がないんだ。」

「そうか……………」

横には大翔がいた。

「あのカプセルは?」

「あ、ああ。これか?」

雷斗はポケットからあのカプセルをだした。雷斗は謎の男の後ろに立った時すでにカプセルを盗んでいたのだ。

「よかった。なら、ボスに知らせてきます。」

大翔は階段を下りて行った。

「ほら! 立て!」

「わかってるよ。」

星美は雷斗に肩を貸して階段を下りて行った。

源幸は救急隊員の担架で運ばれていた。健人は松葉杖で体を支えている。もちろん救急隊員に自分たちがマフィアと言うことは秘密だ。

「ボス、大丈夫ですか?」

「へへ……3か月もすれば大丈夫だ。それより、あれは?」

「ボス……………!!」

「大翔!! あのカプセルは?」

「大丈夫です。」

「なら、お前が持っていてくれ。」

「はい。……………そういえば、雷斗への報酬は?」

「は？そんなこと聞いていないが。」

「え……………あ、いいですいいです。」

「お、おう。」

源幸は救急車に寄せられた。ほかの仲間たちも無事だった。

「……………あの人、嘘をついてたんだな……………」

大翔が左を見ると、そこには星美と雷斗が歩いていた。

「ほら！さっさと歩け！」

「俺ケガ人だぞ！！！」

「ケガなんてなんにもねえじゃねえかボケ！！！」

ガスッ！！

「殴んなよ！！！！いてえだろうが！！！」

「うるせえ！！！」

「」

「ふつ。あの人たち、いいコンビですね」

襲撃 3 - 3 (後書き)

やっと……終わった……

人は失ってからその物の大切さを知る。

ここは謎の部屋。そこに人影が三つ。

「つたく！何故お前があれを盗られるのだ！」

「すいません　様。すぐに取り返します」

「もういい。バルケイドに任せる。お前は下がれ」

「はっ」

「なら、バルケイド、頼むぞ」

「はっ」

二つの人影が部屋を去った。

「今こそ、先祖の恨みを晴らす時だ……」

あのウエポンビルの一件から三日。

大翔と少数のマフィア達はアジトで戦っていた。

「何だあいつは……！」

「知らねーよ！」

「だけどこのままじゃば　　」

ズドオオオオオオン！！

マフィア達に爆風が襲いかかる。マフィア達の眼にはフードをかぶった謎の男が映っていた。だが、その両手にはグレネードランチャーが握られていた。

ダネルMGL

「くそ！またやられた……！」

大翔はリロードをしていた。

「なぜあいつに銃が効かないんだ！！防弾ベストでもつけてるのか！？」

「とりあえず、大翔は逃げろ！あいつはこのカプセルを狙ってる！」

「で、でも」

「いいから逃げろ！！早く！！」

大翔はグレネード弾によってあけられた穴から脱出した

銃声が鳴り終わったあとには無残にもマフィア達の死体が転がっていた。

ドタン！！

「二人ともいるか！！」

「何？大翔」

「俺たちのアジトが襲われてるんだ！！助けてくれ！！」

「なんで？」

「なんでって……」

「俺はタダ働きは嫌だと言ったはずだぞ」

「ボスからは何も言っていなかったぞ！！」

「げ。ばれてた」

「頼む！星美！！」

「わかったよ。行くよ。雷斗は？」

「行かないに決まって　　っ！危ない！！」

雷斗は星美を突き飛ばした。ドアの向こうから何かが飛んできた。

ズドオオオオオオオオオオ！

壁に穴が開き、中を爆風が襲った。そして、雷斗が見たのはパソコンがばらばらになっている姿だった。

「あ、あいつだ！」

大翔がドアの方を指差すと、そこにはあの謎の男がいた。

「あ、あいつが！？」

「てめえ……………」

「っ！雷斗！？」

雷斗はいつの間にかコルト・パイソンを持っていた。そして男へ走りだした。

「よくも俺のマイパソコンをおおおおおおおお！！」

（（そっち！？））

雷斗は銃を向けた。謎の男は電柱に飛び移り、グレネードランチャーを構えた。

ドン！ドン！

グレネード弾が飛んでくる。

「弾速が遅いんだよ！」

雷斗はグレネード弾を次々と避けた。辺りを爆風が襲う。そして雷斗が撃った。

ダンダン！！

だが謎の男はびくともしなかった。

「雷斗！あいつは銃が効かない！！」

「なら刀を持ってこい！倉庫にある！！」

雷斗はそこにあった車に乗り、家の屋根に飛び移る。

「とりあえずあいつをあそこから引きずりおろしてやる！」

雷斗は助走をつけ、飛んだ。

一秒、グレネード弾が飛んできた。

二秒、雷斗は銃を撃ち、グレネード弾と相殺させた。

三秒、爆風の中を通り、電柱へ向かっていく。

だが、雷斗は謎の男にかかと落としされ、地面に叩きつけられた。
謎の男はグレネードランチャーを上に向けた。

「地獄の雨とも呼びましようか」

ズドンズドンズドンズドンズドン！！

グレネード弾が降ってくる。

「なっ……」

雷斗は爆風に襲われた。そして一つのグレネード弾がなんでも屋
へ向かって行った。

ドオオオオオオオオン！！

雷斗はなんとか生きながらえていた。だがなんでも屋が崩壊して
しまった。

「……………てめえ」

「雷斗！刀だ！」

大翔は刀を投げた。

パシッ

「何が何でもてめえをぶっ潰す」

雷斗は刀を鞘から抜き、構えた。謎の男はまた、グレネードランチャーを上に向けた。

ズドンズドンズドンズドンズドン！！！！

また地獄の雨が降ってきた。

雷斗は跳んで、電線を斬った。

バチッ…………

そして、垂れた電線を持ち、壁に向かって走った。そこらじゅうにあった廃車やドラム缶はもう吹き飛んでいた。

「うおおおおおおおおおお！！！」

雷斗は壁を走り、壁と言う名の地面を蹴った。そして一番電柱に近づいたところで手を離れた。謎の男もこれには驚いたらしい。

「いい加減降りやがれええええええええええええええええ！！！」

ズバア！！

謎の男は落ちて行った。だが手を下に向け受け身をした。

「お遊びは終わりにしましょう」

そしてグレネードランチャーを捨てた。

「やはり銃器は苦手です」

その時、雷斗は謎の男に肘打ちを喰らっていた。

「ごはっ…」

「雷斗!!」

「そういえばこの人たちもいましたね」

「てめえ…」

星美はどこからか大量の手榴弾を出した。

「死ねっ!!」

星美はすべての手榴弾のピンを抜き投げた。辺りを爆音と爆風が襲う。

だが謎の男は無傷だった。

「なにっ!!」

ドス!!ゴン!!

大翔と星美は倒れた。謎の男がカプセルを奪った。

「任務完了」

謎の男は去って行った

。

今日は風がよく吹いている。

ある夜、小学4年生である泰雅は7時に始まるアニメを見ていた。

「母さん！風呂は9時にしていいい？今日はスペシャルだから！」

「はいはい。わかりました」

「やったー！」

母は台所で皿洗いをしており、その横には、新聞を読んでいる父が居る。

「父さん、今日は仕事どうだったの？」

「ああ、大丈夫。リストラなんてされないさ」

「そりゃそうだよね」

「母さん。チャンネル変えたでしょ」

「ん？何が？」

「だってアニメが突然終わっちゃったんだもん」

「今日はスペシャルじゃなかったんじゃない？」

「でもまだ三十分になってないよ」

「リモコンは？」

「あ、あつた」

「なんだ。すぐそばじゃない」

テレビには銃が映ってあつた。

『我々は銃神団』

『

変な番組ね」

母はそう言ってリモコンのボタンを押した。画面が暗くなった。

次に映ったのはまた銃。

「あれ？チャンネルが一緒だったかしら」

母はもう一度ボタンを押した。だが、どのボタンでも映ったのは

銃だった。

『チャンネルを変えようとした者。これは全局で放送されている』

母は黙ったままだった。

『我々はこれから世界中での狩り取りを行う。選ばれた者は私の下で下僕として生活できる。だが、選ばれる価値のない者は』

『殺す』

『さあ、逃げるがいい』

そして画面が元のアニメに変わった。

「なんだっただろうね。母さん」

「さあ…ほっときましょう」

母は再び台所へ戻った。

ズドオオオオオオオオオン！！

そして消し飛んだ。父と一緒に。

「父さん？母さん？」

そして泰雅が見たのは血を流し倒れている人間たちとマフィアロボ達だった。マフィアロボの一人が銃を向けた。

ズダァン！！

三ヶ月後。大勢の住民たちが廃墟と化したビルでうずくまっていた。「もうこの世は終わりだ。」「本当に生き延びられるのか？」そんな声が椅子に座っていた雷斗には聞こえていた。星美は頭を抱え、源幸達マフィアは俯いていた。

「はは…俺達マフィアがこのざまだ…」

健人は笑いながらいった。だがその笑顔はわざとらしく、絶望に染まっていた。

「しかたないだろ、あんな数じゃ、俺たちに勝ち目はない。」
大翔はそう言った。

「だけど！このままじつとしてたらいつか見つかつちまう！それに食料も少ないんだぞ！食糧を手にするためにどれだけ仲間が死んだことか

「わかってる！でも手の打ちどころがない！！」

健人と大翔は黙ってしまった。

ジ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
!!

その音と同時に住民が悲鳴を上げた。なぜならその音はマフィア口ボがやってきた合図なのだ。子供は泣き叫び、大人たちは逃げ道がないか探している。

ズダダダダダダン！！

「ぐおあ あああああ！」

外を見張っていたマフィアが断末魔を上げた。

「くそっ!!」

... $T_{\alpha}T_{\beta}T_{\gamma}T_{\delta}T_{\epsilon}T_{\zeta}T_{\eta}T_{\theta}T_{\iota}T_{\kappa}T_{\lambda}T_{\mu}T_{\nu}T_{\xi}T_{\omicron}T_{\pi}T_{\rho}T_{\sigma}T_{\tau}T_{\upsilon}T_{\phi}T_{\chi}T_{\psi}T_{\omega}$...

マフィアロボがやってきた。雷斗は住民の波を掻い潜りマフィアロボに銃を向ける。第一目目の犠牲者が出た。マフィア達も武器を持ち、マフィアロボを撃つ。犠牲者がどんどん増えていく。

そして三分後。マフィアロボが全員倒れた。住民が半分減った。辺りは紅に染まっている。源幸は手榴弾を投げ、穴を開けた。住民は源幸を突き飛ばして逃げていく。

ドドドドドドドド！！

「ボス！！大翔逃げろ！！ここは俺がやる！！」

健人は全員をビルの外に追い出した。そして手榴弾の安全ピンを抜いた。

「健人！！」

健人は手を親指以外の指を閉じて、大翔に向け笑った。

「後は頼む」

大翔はそう健人が訴えているのを感じた。そして

ズドオオオオオオオオオオ！！！！

ビルは跡形もなく崩れてしまった。

「健人……」

「いくぞ。大翔」

「でもボス！」

「健人の犠牲を無駄にしたいわけではないだろ？急ぐぞ」
「……はい」

雷斗たちはビルを後にした。

今日は風がよく吹いている。まるで人々の涙を乾かすために。だがそれでも星美は涙を流し続けた。

「…雷斗」

「なんだ？」

「私たち、本当に生き延びられるのかな」

「知らない。だが、あきらめてはいけないと思う。それだけだ」

「……………」

「源幸、どこに行くんだ。」

「フェアリーマウンテンに向かう。あそこはマフィアロボ達が少ないだろう。」

「だが、妖精たちは？」

「それはいないらしい。」

「そうか。」

辺りは何もなく、あるとすれば人の死体だけだった

。

復讐の部隊

ザクザクザクザク……

雷斗たちはフェアリーマウンテンのふもとにいた。妖精はなぜかどこにもいない。

「変……だな」

と、雷斗。

「ああ、噂どおり、ちつともでてこねえ」
源幸。

「なんか……不気味」

星美。

「とりあえず、どこか身をひそめる場所を探そう」

最後に大翔がそういった。ほかのマフィア達も進んでいく。

後ろから銃声がする。あの廃墟から逃げて行った住民たちはおそらく殺されただろう。

……あのマフィアロボ達に。

「く……」

大翔は拳を強く握っていた。なにせ、あの仲間の健人が殺されたのだ。マフィアロボ達に対する怒りは計り知れないほど強いだろう。「あれは？」

星美は一点を見ていた。見るとほら穴がある。雷斗たちは走り出した。

「いやあああああああ!!」

一人の女が悲鳴を上げた。ほかの者たちも恐怖に怯えている。総勢40人ぐらいだろうか。

「ヘッヘッヘ。オマエタチモココデオワリダ」

その者たちはマフィアロボ達の銃を見ていた。銃は黒く光り、悪

魔のようにも見える。

「シネエー!!」

ズダアアン!!

それはマフィアロボ達の頭を完全に撃ち抜いていた。ガシャンと音を立て倒れる。

女がマフィアロボの先に見た物は銃を持った金髪の男だった

「お前たちもマフィアロボから逃げてきたのか？」

「はい。ですが……」

「僕は両親を殺されました」

「私は夫と子供をさらわれました」

「俺は仲間を……殺された」

「……」

大翔は黙ってその話を聞いていた。

「ボス」

「なんだ、大翔」

大翔は立ち上がった。

「俺、あいつらをぶっ潰しに行きます」

「そうか」

「ボス。今までお世話になりました」

大翔は森へ去って行った。その時源幸も立ち上がった。

「さて、戦争の始まりだ」

めに。

大翔はドラム缶に隠れていた。相手からの銃弾を防ぐた

大翔の前にはマフィアロボが五人。明らかに大翔のほうが不利だ。さらに、一人はガトリング砲の発展形であるM61バルカンを持っている。

ついに弾がなくなった。大翔は死を覚悟した。

「すまない、健人……」

その時、雄たけびが後ろからするのが大翔には分かった。それと同時に銃弾が降ってくる。

大翔は振り返った。見えたのは雷斗たちが走ってきている姿だった。中にはマフィアロボにおびえていた集団の男たちもいる。

「大翔！」

「ボス！　なんでここに――」

「それは後だ！　いまはあいつらを片付けるぞ！」

源幸は走って行った。大翔も行こうとしたが足が動かなかった

ドサア……

ついに最後の一人が倒れ男たちは雄たけびを上げた。

死者、負傷者はゼロ。まさに奇跡だ。

「星美、待機している男たちをここに呼べ――」

「ボス」

「ああ大翔か」

「なんでここに来たんですか？」

「そりゃ、お前を助けるためさ。それに俺たちは復讐レジスタンスの部隊を結成したんだ。だが、一人足りなくてな。今、あと一人募集中なんだ」

「俺……」

「なんだ？」

「お願いします。復讐の部隊に入らせてください。お願いします！」

大翔は頭を下げた。源幸の手が拳がった。

「バカヤロー！　良いに決まってんじゃねーか！」

そして大翔を叩いた。二人は笑った

復讐の部隊リスト（前書き）

これを見ながら小説を読んでもいいと思います

復讐の部隊リスト

A、アルファチーム 熊堂源幸、前田信也、実海藤健二、小垣桂太
B、ブラボーチーム 要人大翔、高木亮、武田幸樹、土井新輝
C、チャーリーチーム 熊堂星美、堀川成鬼、石川流星、井川洋二
D、デルタチーム 月牙雷斗、神谷紳太郎、吉原学、奥谷健一
E、エコーチーム 甲賀雄一、神崎洋介、谷岡一月、五里泰雅
F、フォックスロットチーム 佐藤慶太郎、鈴木太郎、高橋浩二、
赤塚真一

G、ゴルフチーム 賀川龍平、積実勉、晒谷大貴、笹川慶介
H、ホテルチーム 佐々木雄太、渡辺達樹、森田真崎、田中亮太
I、インディアチーム 勝山懸河、近藤信介、永淵伊織、福岡和樹

総勢36名。

復讐（１）

「まずはここから南にある武器倉庫に集合だ。詳しくは地図を見
てくれ、何かあったら無線機で呼んでくれ。以上だ、解散！」

周りの者たちは一斉に駆け下りていった。

「行くぞ雷斗」

トトトトトトト

雷斗の右隣にいる神谷紳太郎は辺りを警戒していた。後ろには吉
原学がいる。前にいる神谷紳太郎は銃をずっと見つめていた。

「銃が怖いかな？」

「……はい」

神谷紳太郎は大学生の経済学部に所属していた青年だ。マフィア
ロボにより父と母を殺され、弟が連れ去られたと言う。

吉原学は妻を亡くした中年の男。奥谷健一はマフィアの一人である
奥谷が言った。

「俺たち……本当に生きて帰れんのか？」

「知らん。だが俺たちはあいつらを死ぬまで叩き潰す。そうだろう
？」

なんと中年の男がマフィアの一人を励ましている。

「そうですね……っ！ シッ！」

カシャカシャカシャ……

四人の前をマフィアロボ達が通り過ぎて行った。

「ばれてない……」

「あぶねえ……」

「まだこんな所にいたのか……ガラクタどもめ……」

『こちらアルファチーム』
この無線機からの声が雷斗たちデルタチームをピンチに陥れたのだった

星美が率いるチャーリーチームはマフィアロボ達を前にして建物の陰に身を潜めていた。

マフィアの一人である堀川成鬼が言う。

「どうやってあいつらをぶっ潰す？」

「そうね……あのビルの屋上からの狙撃はどう？」

星美は窓が割れ放題の青いビルを指差した

「うわ、散らかり放題だなあ」

住民だった青年、井川洋二が言った。

「当たり前だろ」

同じく石川流星が返す。転がっていた物はパソコンや椅子や誰かの死体だった。

「う……」

井川が口で手を押さえた。

「吐くなら角の所にやれ」

井川は走って行った。どうやら石川流星は平気らしい。

「慣れてるのか？」

堀川が聞く。

「リゲートビル襲撃事件の被害者だったからな」

リゲートビル襲撃事件とは今までマフィアロボが起こした事件で一番恐ろしい事件である。

立て籠もっていたマフィアロボが全滅した後には床は血の色に染まり死体で埋め尽くされていたと言う。

「まさか生存者がいるとはな」

「ああ、そのおかげでここまで生き延びられた」

『こちらインディアチーム。聞こえるか？』

星美の持っていた無線機から声が聞こえた。

「こちらチャーリーチーム。いったい何が起こったの？」

『俺たちは今広場の近くにいますんだが、マフィアロボがいて進めない。手を貸してくれないか？』

「わかった。そこにビルは見える？」

『青いビルが見えるぞ』

「うん。そこに私たちが居るの。その屋上からマフィアロボを狙撃するから、マフィアロボの注意が私達に引いたらそこを攻撃して」

『わかった』

「さて、行くわよ」

カツカツカツ……

ビルの屋上はほとんど錆びていて柵は所々凹んでいた。

下にはあの広場があった。星美は無線機でインディアチームに通信をした。

「こちらチャーリーチーム。今からマフィアロボ達を狙撃する」

『了解』

堀川成鬼は背中にしょっていたゴルフバッグから狙撃銃を取り出した。

レミントンM700である。それをフェンスの隙間に入れた。

堀川成鬼は10倍のスコープを取り付けた。そして片目を瞑った。

ズダァン！！

レミントンM700から放たれた銃弾はマフィアロボの頭を撃ち抜いた。

数分後、無線機から声が聞こえた。

『こちらインディアチーム。マフィアロボを全員ぶっ潰して倉庫に隠した。こちらは移動するからそちらもマフィアロボが来る前に移動してくれ』

「わかった」

だがマフィアロボはすぐそこに迫っていた

復讐(2) くやけくそく

銃弾が壁を削る。雷斗率いるデルタチームはマフィアロボから攻撃を受けていた。

『もうお前たちしかないんだ!!』

「わかったよ! すぐぶっ潰していくから!」

雷斗は通信を切り、壁を登った。

「あんたらはそのまま銃をぶっ放しとけ!」

「で、でも……」

神谷が戸惑う。だが吉原は銃を壁から突き出し、標的も見ずにトリガーを引いた。

「でたらめでも撃った方がましなんだよ!」

奥谷も壁から銃でマフィアロボを撃つ。神谷もついに銃を握った。

「おらおらおら!! 死にやがれえええええ!!」

なんと神谷は広場に向けて走り出しマフィアロボに突進した。

「なっ……」

神谷はさらにマフィアロボにとび蹴りを喰らわせ、口に銃を詰め込みトリガーを引いた。

だが後ろにいたマフィアロボが神谷に銃を向けた。

「させるか!!」

上空から雷斗が飛んできた。雷斗はマフィアロボと反対方向に顔を向けそのまま急降下してマフィアロボの脳天を蹴り落とした。マフィアロボはガラガラと崩れる。

「無理すんなよ」

「あ、はい」

二人が後ろからやってきた。

「お前、性格変わってなかったか?」

「あのときはやけくそになったんですよ」

「いや、それでも」

「さあ、早く武器倉庫に向かいましょう」
「あ、逃げた」

星美率いるチャーリーチームはさつき来たマフィアロボと交戦している石川を残してビル endpoint に捕まってぶら下がっていた。

「行くぞ！」

堀川が勢いをつけ窓を突き破り下の階へ飛び移る。

「次はあんたよ！」

「ええっ！！」

星美が井川に呼びかける。井川はまだ勢いをつけていなかった。

「仕方無いわねっ！」

星美が井川を蹴る。井川は吹っ飛び堀川の所に飛んで行った。

「もう大丈夫。こっちにきて」

「わかった」

星美も飛び移った。だが、石川がいつになっても来ない。

「まさか……」

星美は井川を突き飛ばし、階段を上った。

星美が見たのは石川の姿だった。なんと木箱がそこにある。

「まさか……」

「大丈夫だ。やけくそなら何とかなる」

石川は木箱を押した。

「やめろっ！」

星美は走ったが出口は木箱に塞がれた。そして何かの断末魔の叫びが聞こえた。

「くそっ」

後ろにいた堀川が言う。星美は大きく息を吸い込んだ。

「ふざけんなあああああ！！！」

大翔率いるブラボーチームでは、大翔が車の電線を弄っていた。

「あいつらは？」

「まだ大丈夫。気付かれてない」

物陰から顔を覗かせている高木が大翔からの問いに答える。

高木が見ているのはマフィアロボ達だった。武田は銃を扱う練習をしていて、土井は車をじっと見つめていた。

武田は十代の若い男であり、本当はフェアリーマウンテンに隠れていることになっていたのだが自分から部隊に入ることを決めた。土井は五十代の男であり、娘を奪われたと言う。高木はマフィアの一員である。

「ちよつと貸してみな」

土井は大翔を車から降りさせた。

「これでも車関係の仕事をやっていたものでね」

土井が電線を弄って二分。車にエンジンがかかった。

「三人とも乗るか？」

大翔は助手席、高木と武田も後ろに乗った。

「よし、行くぞ」

土井はアクセルを踏んだ。車は物陰から姿を現した。車を銃弾が襲う。どうやら気付かれたらしい。

「体当たりするぞ」

「ええっ!？」

武田が止めようとしたがその時には土井はハンドルを回していた。「やめろおおおおおおお!!」

ドゴッ……

マフィアロボ達は吹っ飛んだ。車は少し凹んだ。

「……すげえ!」

「もっとやっちまえ!!」

「もういない」

だがマフィアロボはすぐにやってきた。

「体当たりだ！」

「いや、そのまま行くと壁にぶつかってしまう」

「だったらやけくそだ！スピードを上げて乗り捨てろっ！」

土井はシートベルトを外し、ドアのカギを開けた。車は時速100キロでマフィアロボに突進していく。

「今だっ！」

四人はドアを開け、飛び出した。瞬時に爆風が襲う。マフィアロボは消えて無くなっていた。

復讐（3）～逃走 凡人&超人对超人～

源幸率いるアルファチームでは武器倉庫周辺で交戦していた。武器倉庫にはマフィアロボが待機していたのだ。アルファチームのほかにゴルフチームとエコーチームがマフィアロボ達と交戦している。

「くそっ、きりがない」

源幸率いるアルファチームはマフィアは源幸一人で、ほかの三人は一般人。攻撃力は少ない。

ゴルフ、エコーチームは応援にきたマフィアロボ達を足止めしている。完全にこちらの方が不利だ。

「源幸！」

後ろから雷斗たちがやってきた。

「やっときたか！」

「すぐにぶっ潰してやる……って、何だこの数は!!」

マフィアロボは今も増え続けている。今ではもう百人近くいる。

足止めが効かなくなったのも事実だ。

「これの出番だ」

雷斗は背負っていたMAS 半自動小銃を持った。

「久しぶりだな、これを使うのは」

雷斗は銃を構えた。物陰から出て行こうとしたが、銃弾が止まな

い。

「くそっ身動きができない」

その時、トラックが走ってきた。

トラックはマフィアロボを轢き、武器倉庫の入り口で止まる。中のコンテナからフォックストロットチームとホテルチームが出てきた。

「行くぞおおおおおおお!!」

フォックストロットチームとホテルチームは物陰に隠れ、マフィ

アロボと交戦する。

ドアが開き、ブラボーチームが出てきた。

「仲間を集めてきた!!」

ブラボーチームはアルファチームに駆け寄る。

「よし。これで倒せる」

だが、源幸の予想は外れた。

あのカプセルを奪った男がやってきたのだ。

「お前は……」

「逃げる!こいつはやばい!!」

大翔がそう言った瞬間、ホテルチームの一人が蹴り飛ばされた。

「くそっ」

近くにいた高木が男を撃った。だが、やはり銃弾は効かなかった。

「逃げる!!」

復讐の部隊達は散らばった。男はどうやら雷斗に目をつけているらしい。

男はゆっくりと、近づいていく。

「く……」

トットトットトット……

雷斗はあるデパートに逃げ込んだ。

「お前らもどこかに隠れる」

三人は頷き、雷斗のもとを去って行った。

雷斗は商品が置かれている台の下に隠れた。台の下は布で隠されている。

「くそっ……こんな時になんで

」

コツコツコツ……

足音が聞こえる。ついにあの男がやってきたのだろう。

「……」

雷斗は息をひそめる。その時突然ガラスが割れる音がした。

外を見ると誰かが男と戦っていた。その顔はフェアリーマウンテンで見たことがある。

チャーリーチームの石川流星だ。

石川がが持っていた刀を振り下ろすと男は白刃取りをして回転しながら壁に叩きつける。そして刀を取り上げた。雷斗は思わず飛び出し、コルト・パイソンのトリガーを引きながら男に体当たりした。男は仰向けに倒れ、雷斗は石川の手を握り男から離れていく。

「すまない」

「お前、なぜ一人なんだ？」

「その話は後だ。とりあえずこの男をなんとかしなければ……」

石川はもう一つの刀を雷斗に渡した。

ダッ！！

石川は走って刀を縦に下ろす。男は横にすれすれで避けた。

まさに紙一重。

石川は斬撃の連打を繰り返すがこれも紙一重で避け、男が石川を蹴り飛ばす。

次は雷斗が刀を構え走ってきたが、男は拳銃を出して撃ってきた。雷斗はぎりぎりで避け、男はすぐに拳銃を仕舞う。

まるであの大人気ホラーアクションゲームのウェ〇カーである。

石川は何とか立ち上がり刀を投げた。しかし刀は男の人差し指と中指によって取られ、逆に男の武器になってしまった。

「くそっ」

石川はグロック17を取り出した。

「やめろ！あいつは銃が効かない！」

「なんだって！？」

石川はトリガーを引いた。たしかに効いていない。

「くそっ……」

石川は走ってどこかに行き、非常に長いL字金具を持ってきた。

（ネジを入れて固定するアレ）

「トンファの代わりだ！」

そう言って突進した。

「だめだ！ 無茶すぎる！」

だが、意外にも互角だった。

「二人とも超人かよ……」

復讐（4） リミッター解除

ガキイン！！

「く……」

「そろそろ疲れてきたようだな」

「いや……まだまださ！」

石川がし字金具を持ってから十分。まだ死闘は続く。

「あの二人が戦っている間に何とかあいつらを探さなければ……」
雷斗はデパートの中を走っていた。

「神谷——！！ 吉原——！！ 奥谷——！！」

そう言いながらゴミ箱の蓋を開ける。

「いない！！」

次はトイレトペーパーの山を崩す。

「いない！！」

雷斗が冷蔵庫のドアを開けようとすると声が聞こえてきた。

「……何してるんだ？ 雷斗」

雷斗が後ろを振り向くと奥谷たち三人が立っていた。

「ど、どこにいたんだ？」

「ずっとついてきたんだが」

次は吉原が言う。

「そ、そうなの？」

「もしかしてわかってなかったんですか？」

神谷。

「う、うん」

「馬鹿だろお前」

最後に奥谷が止めの一言を言った。

「……………」

「……………」

「とりあえず、ここから避難しよう。あの男は大丈夫だ」

「わかった」

雷斗はデパートの入り口まで三人を導いた。

「ここから、武器倉庫に行くんだ」

「え？ 雷斗さんは？」

「ここに残る」

「何でだ？」

「俺はこう見えても優しい一面があるんだぞ？」

雷斗は三人を見送り、あの二人のもとへと走った。

石川は腕に傷を負っていた。

「大丈夫か！？」

雷斗は石川のもとへ駆け寄った。

「く……」

「おい！」

「……雷斗か」

「大丈夫か！」

「あれを見る……」

石川は男を指差した。男の服が破けていて心臓部にクリスタルが貼られている。

「あれが弱点だ……あれを銃で攻撃しろ……刀では効かない……」

「わかった」

「……くっ」

石川は気を失ってしまった。

「弱点は見破られたが、それでもお前はここで終わりだ」

男は刀を投げた。咄嗟に近くにある箱でガードする。

そして雷斗は銃を取り出した。だが、その時には男は目の前にいた。

ビュッ……

雷斗は前転で避けた。後ろにいた棚には穴が開いていた。

「あの手は槍並みだな」

ホルスターから二丁のコルト・パイソンを取り出し男に向ける。

だが男はすでに雷斗の後ろにいており、雷斗は蹴り飛ばされ、M A S 半自動小銃を奪われてしまった。

「くそっ！」

雷斗はテーブルを蹴り飛ばしてくる。突如に銃弾が襲う。テーブルの台は傷だらけになってしまった。

銃弾が止んだ時にはすかさず飛び出し銃を撃つ。

だが、男は既に居なかった。

カチャ……

雷斗は後頭部に銃口を押し当てられていた。

「神に祈る時間を少しやろうか？」

「……生憎、俺は神とか言う奴を信じじゃない。昔からね。それと」

「お前も神に祈ったほうがいいんじゃないか？」

「何？」

バシュッ……

一つの銃弾が胸のクリスタルを壊した。

「ぐ……………」が……………」

男はそのまま倒れてしまった。

「雷斗。大丈夫か？」

「星美。なんでここに？」

「このバカヤローを探しに来たんだよ」

星美はブレン・テンをホルスターに仕舞い、石川を蹴った。

「ほら、早く起きやがれ」

「ぐ……………」

「けっ……………無茶しやがって」

星美はあのビルで拾った救急キットを使って石川を治療した。

「……………ほかの奴らは？」

「先に武器倉庫に行つたよ。早く行くぞ」

星美は石川に肩を貸した。

「雷斗、先にリードをしてくれ」

「お、おう」

雷斗は銃を構え、警戒しながらデパートを出た。

「……………誰もいないようだ」

「そうか……………」

雷斗たちは武器倉庫へゆっくり進んでいった。

「ぎ……ちっ」

デパートの中で倒れていた男はクリスタルに埋められていた銃弾を抜いた。

「まさか他人の力でリミッターを解除してしまうとはな」

ズドオオオオオオオオン！！

男は正拳突きで壁に穴を開けた

「ない！　ない！　ないぞー！！」

「くそっ……どこにあるんだ！？」

雷斗と星美は武器倉庫で武器を探していた。だが閃光手榴弾三個以外何も見つからなかった。

「……どうしたんだ？」

休んでいる石川が星美に聞く。

「武器が無いんだよ！！　まさか……私たちの分はこれだけ……？」

「んなわけないだろ。ここは結構武器があつたんだ。そう簡単になくなるもんじゃねえだろ」

雷斗は一度ここに来たことがある。依頼で武器を盗んだのだ。

ガサツ……ガサツ……

星美が軽い木箱を入り口に押し出す。

「……星美、来てみる」

「どうしたんだ？」

星美は再び木箱を押し出して雷斗の所へ向かった。

「これってなんだ？」

そこには地下に降りる扉があつた。

カツカツカツカツ……

星美と雷斗はその先に向かった。石川は雷斗に肩を貸されている。
「ここは？」

そこは小さな部屋だった。机が一つ。椅子が八個並べられている。
椅子には雷斗と星美のチームの仲間がいた。

「やっときたか」

奥谷。

「石川も無事か」

堀川。

「心配掛けさせるなよ」

吉原。

「みんな、すまない」

石川は笑いながら言った。

「源幸達は？」

「先に行った」

「どこに？」

「奪われた武器を探しに行くだとき。俺たちも行くか？」

「決まってるよ。父さんばかりに活躍させたくないからね」

星美はホルスターからブレン・テンを引き抜いた。

「ぐ……」

石川が壁に倒れる。

「お前はここで休んどけ。行くぞ」

雷斗は扉へと歩いて行った。

「……待て」

「なんだ？」

「絶対回復して追いついて見せるからな」

「やってみろ。とりあえず死ぬなよ」

雷斗とその仲間達は石川流星を残して武器倉庫を出た。

「よし、ここからはチームに分かれて武器を奪った奴らを探す。まずそれからだ」

「OK」

チャーリーチームは武器倉庫から去って行った。

「よし、俺たちも行くぞ」

「……ちよつとまって」

奥谷が雷斗たちを止める。

「何だよ一体」

「バイクの免許持つてるか？」

全員がうなずく。

「なら、行けるな」

奥谷はある所を指差した。ある所とはバイクショップのことだった。

復讐（5）　　暴走族（仮）

「絶対逃がすな！！　追え！！」

源幸がそう言いながら一つのトラックを撃つ。

「わかってるよ！！」

横にいたアルファチームの前田信也が銃で撃ちながらトラックを追いかける。

ここは今は廃墟と化した大通り。その真ん中でアルファチーム、エコーチーム、フォックストロットチームが武器が積み込まれたトラックを追いかけていた。

トラックにはマフィアロボが一体。時速は20？。源幸達は体力が限界にまで来ていた。

源幸は無線機を取り出した。

「おい！　仲間たち！　聞こえるか！！　今武器が積まれたトラックは……　キンジル大通りにいる！！　早くこっちに来い！！」

それはバイクに乗った雷斗達にも聞こえていた。

「よし！　お前たち！！　キンジル大通りに急ぐぞ！！」

雷斗達はスピードを上げ、道路を爆走していった。

「キンジル大通りって、ここよね……」

石川流星除くチャーリーチームは路地裏からキンジル大通りに出た所だった。

ゴオオオオオオオ……

星美達の左側から一台のトラックが走ってくる。

「まさかあれが武器を積んだトラック？」

「どっちでもいいが潰す！」

そう言いながら堀川成鬼が銃で運転席の窓を撃つ。

ズダン！　ズダン！　ズダン！　ズダン！！

ガシヤアアン！！

窓は四発で割れてしまった。

「次はタイヤ！！」

堀川が右へ走りながら左手で銃を持ちタイヤに狙いを定める。だ
がうまく標準が合わない。

「立ち止まったほうがいいな」

堀川は立ち止まり確実に当てるように標準をタイヤに向けた。

バシユツ……

「くそっ！！　あのトラック急にスピードをあげやがった！！」

「これって……？」

井川洋二が拾ったのはトラックが落とした銃だった。

「ぜえ……ぜえ……クソッ」

源幸は膝に手をついていた。他の者たちも疲れ果てている。

「お……おい……」

前田信也が源幸に話しかける。

「なんだよ……っ!？」

源幸が見たのは爆走するバイクの集団だった。雷斗が乗っている。

「暴走族（仮）参上！！」

「ら……雷斗？」

「源幸！！　トラックは!？」

「もう先に行った……そのバイク」

源幸が後の言葉を言おうとした時には雷斗達は去って行ってしまっていた。

雷斗達が源幸の所を去ってから五分。トラックはまだ見えなかった。

「もうこの大通りを抜けたんじゃないか？」

吉原学がそう言う。

「そうかもしれないな……」

「あれは……星美さん？」

「なんだって!？」

神谷が指差した所を見ると手を振っている星美の姿が見えた。

「トラックはどこに行った!？」

「もう先に行った! 私も乗せて!！」

「これも持つて行け!！」

「何？」

井川が星美に渡したのはトラックが落とした銃、トンブソン・サブマシンガンだった。

「ナイス!」

星美はそれを受け取り、雷斗と共にその場所を去った。

「雷斗!！」

星美が叫び雷斗は身を屈め星美がトンブソン・サブマシンガンでタイヤを撃つ。

トラックは左右に揺れながら走っていた。

「くそつきりがない!」

雷斗はコルトパイソンを取り出し、スピードを上げてトラックと並んだ。

「星美! 運転頼む!」

「えっ……ええ!？」

雷斗は星美の手を握ってハンドルに持たせた。

「私……運転なんかできないわよ」

「バランス保てば何とかなる！」

雷斗はそう言い、トラックに飛び乗った。

「いやあああああ！！」

バイクがどんどん離れていく。雷斗は中にいたマフィアロボを撃ち、運転席の中に入った。

雷斗はマフィアロボを蹴り飛ばしてブレーキを踏んだ。

キイイイイイイイイ……

トラックは煙を上げながら止まった。

「いやあああああ！！」

ガン！……

星美の運転していたバイクは曲がった電柱に当たり倒れてしまった。

「大丈夫か？」

「足が……抜けない……」

星美の左足がバイクに挟まれていた。

「ったく……」

雷斗はバイクを掴んだ。

「……よつと」

バイクは雷斗の手によって少し持ち上がった。

「……ごめん」

「別にいいさ」

星美はバイクから抜け出してトラックのコンテナの扉を開けた。

中には箱が入っており、中には手榴弾やアサルトライフルなどが入っていた。

後から吉原たちがやってきて後に復讐の部隊全員（石川を除く）
が集まることとなった。

復讐（6）　　ゝアジトの居場所ゝ

「ヒヤッハー！　武器がいっぱいじゃねえか！！」

前田信也が叫んだ。他の者たちは銃を肩にかけたりホルスターに入れたりしている。

「よくやった。雷斗」

源幸が雷斗を褒める。雷斗は腕を組んで考えていた。

「どうしたんだ？」

星美が雷斗にその訳を聞く。

「こんなに武器を持っけていても、マフィアロボに勝てるのか？」

「そりゃ……そうだろ」

「俺はそうは思わないな。敵の銃神団はどんどんどこからかマフィアロボを送り込んできやがる。俺たちは弾にどうしても限りがあるんだ。だから銃神団のアジトを叩かなければ意味がないんだ。どうにかして敵のアジトを見つけなければ……」

「……」

その時、右側の路地裏からマフィアロボ10体がやってきた。

「いたぞ！！　やっちまえ！！」

その中には前雷斗と戦った東孝太郎がいた。どうやらマフィアロボを指揮しているらしい。

「全員トラックに隠れる！！」

源幸が叫ぶ。全員無事らしい。危うく犠牲者が出そうになった。

ここまで全員が生存しているのが奇跡なのだが。

「あいつも銃神団の一人だったのか……待てよ、あいつを捕えれば敵の本部を聞き出せるかも……！！」

雷斗はスタングレネードとアサルトライフルのM16を持ってトラックの屋根によじ登った。

「シヨック死するなよ！！」

雷斗は安全ピンを抜いてマフィアロボ達に投げた。

パン！

孝太郎は怯んでいるがマフィアロボは特に変わった様子はない。

「ロボには効かないか……」

雷斗はM16でマフィアロボ達を撃つ。そしてトラックを飛び降りて銃弾を避けた。走りながら雷斗はM16を単発射撃から連発射撃に変え、弾が切れるまで撃った。

しばらくして孝太郎の視覚と聴覚が戻った。孝太郎が見たのは銃を自分に押し付けている雷斗の姿とマフィアロボの死体だった。

「ひっ！……」

「銃神団のアジトを言え。」

「は……はい……」

孝太郎は両手を上げた。

「ウエポンビル……」

「ウエポンビルだど！！ そんなわけないじゃないか！！」

横にいた大翔が言った。

「まあまあ、最後まで聞こうぜ」

その後ろにいる高木が大翔を抑える。

「ウエポンビルの……地下……」

「地下か……確かに俺たちは地下なんて調べていなかったな……くそっ」

大翔は地面を殴る。雷斗は孝太郎を気絶させ、立ち上がった。

「殺すか生かすかはお前たち次第だ」

雷斗はバイクに乗って去って行った。

孝太郎は気絶したまま誰にも殺されず取り残された

。

擦り傷

「……懐かしいな」

雷斗がウェポンビルを見上げながら言う。ウェポンビルは少し穴が開いていた所もあつたが原型は留めていた。

「俺は今も、ここで起きたこと全部覚えてる」

大翔はそう言いながら拳銃をホルスターから取り出した。源幸が復讐の部隊の前に立った。

「今までは全員無事で来たが、ここからは敵の本拠地だ。誰かが死ぬかも知れねえ。だけど、自分が生き残ったら、後ろの奴も生き残る！ それだけは忘れるな！ いいな！！」

全員が頷く。

「行くぞおおお！！」

復讐の部隊達はウェポンビルへと進んでいった。

その時。

タッ。

復讐の部隊の前にあの雷斗と石川が戦った男が立ちふさがった。

「なっ……」

「ここからは通さない」

「お前……死んだはずじゃ……」

男の心臓部には割れたクリスタル。

「リミッターを解除した。もうすぐ俺は爆発するが、その代わりに俺は超人的な力を手に入れた。お前たちの敗北は間違いない」

「要はそれまで時間を稼げばいいんだろ」

雷斗が銃を抜き、構える。後ろの者たちも一斉に銃を構えた。

「必ず一人で死んでみますよ」

男は雷斗達に突進した。雷斗はトリガーを何回も引いているが男は素早く避けていた。

スパアンツ！！

「なっ……」

雷斗が持っていた二丁のコルトパイソンは一瞬で弾かれてしまった。男はミドルキックで雷斗を蹴り飛ばす。

「雷斗！！」

星美が持っていた三個の閃光手榴弾の安全ピンを抜き、男に投げつけた。男は冷酷な表情でその三つの手榴弾を見つめていた。

パパン！！

手榴弾が爆発し、閃光が辺りを照らす。だが、そこに男の姿はなかった。

「いったいどこにいる……？」

雷斗は銃を拾い、構えながら警戒する。

「上だ！！」

前田信也が叫ぶ。上空を見ると、男が幾つもの手榴弾を持って落下してきた。

バコツ……シュツ

男が地面に着き、地面にひびが割れ、男は全方向に手榴弾を投げた。

「っ！？ 逃げろ！！」

雷斗が言ったが、既に遅く、数名が破片と化してしまった。初めての犠牲者。

「くそおおおおー！！」

大翔が男を撃つ。男は銃弾を一個つつ避け、歩きながら大翔に近づいていた。

そして右手を手前に引いた。

「あれは……っ！！ 大翔！！ 逃げろ！！」

雷斗は叫んだ。だが、大翔は怒りの余り、その場から離れなかった。

そして大翔の弾が切れた。大翔は立ちすくんでいる。

男が腰を曲げた。

ビュッ……

「ぐっ……！！」

源幸が大翔を飛び押した。大翔は助かったが、源幸は背中に掠り傷を受けてしまった。

「ぐはっ！」

源幸が男の前に倒れる。男は銃をホルスターから抜き、源幸の後頭部に当てた。

その時、雷斗が走り出し、飛んで両足で男の顔を蹴りとばす。

男は地面に顔を擦り、怯んでいるようだったが、雷斗は両足を押えていた。源幸は前田に遠くに運ばれる。

「どうした！ 雷斗！」

星美が雷斗に駆け寄る。

「あいつの頭……固い……」

星美は男を見た。男は顔を擦り剥いているはずだったが、出血していなかった。

だが擦り剥いた所には銀色の物が埋め込まれていた。

「お前……まさか……」

「そう。俺はロボットだ」

男は擦り剥いた傷から皮を頭から足までを全て剥いだ。

そこに居たのは男では無く、赤い眼をした銀色のロボットだった

雷斗は走った。

元男のロボットは雷斗に向かって走り出す。雷斗は二丁のリボルバーでロボットを撃つが、標的は楽々と避ける。

「あのポンコツがあー!!」

源幸はアサルトライフルでロボットに集中砲火を浴びせる。

「あのポンコツを撃てええ!!」

復讐の部隊達は一斉にロボットに向け発砲した。ロボットは避け切れず被弾し、動きが止まった。

「雷斗、先に行け!!」

「大翔ふざけるな! 俺もここで戦う!!」

「ここは俺たちに任せろ!! 早く行け!!」

「……………わかった」

雷斗は源幸の言ったあの言葉を思い出しながらウェポンビルへと走った。

自分が生き残ったら、後ろの奴も生き残る! それだけは忘れるな!

雷斗は走った。(後書き)

とりあえずここでこの小説は終わりです。ご愛読、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7997m/>

お前たちをぶっ潰しに来たんですが。

2010年12月4日12時25分発行